

松任谷正隆の

イ業のひとりごと

09

VOL.09 出歯亀

前回書いたのだけれど、我が家は不本意ながら引っ越しを余儀なくされた。

新しい場所は、確か祖母が所有していた土地だったと思う。

前の土地は買い叩かれた代わりに新しい土地は安く手に入れたというわけだ。

場所は川南という、祖母の家から歩いて5分のところ。

これは母にとっては願ったり叶ったりである。毎日のように実家に入り浸れるではないか。

それまでの300坪から100坪ちょっとにダウンサイジングするのが憂鬱と言えば憂鬱だったけれど、

建て増し、建て増しで統一感のない家よりは、ピカピカの新築の家がいいに決まっている。

設計は誰に頼んだのか、全く覚えていないが、知り合いの知り合い、

みたいなところでたいしたところではなかった。

それまで平屋暮らしだったので、ぜひとも2階建てを、ということで2階建ての家を設計してもらった。

そう、まだ2階建てがモダンだ、と思われていた時代だ。

設計にはまだ高校生だった僕の意見も取り入れられた。

父親は自分だけの意見で作るのに自信が無かったのかもしれない。

僕のアイディアは階段室を大きなガラス張りにする、というもの。

でも後になって判明するのだが、

ここに西日が入って、夏の暑いことと言ったら……。

それでも、あまり文句を言われた記憶がないのは、

2階に部屋があるのは僕と弟の二人で、

灼熱地獄になるのは我々だけだからだったからかもしれない。



それよりも、自分たちの新しい家が建ち始めたときは興奮した。

日一日と柱の数が増えていき、僕たちは夜になるとそれを見に行った。

たいていは親父と僕と弟の3人。たまに母親が一緒、といった感じ。

階段が出来て2階に上がるようになると、

まだむき出しのままの梁に寄りかかりながら外を見て3人でうつとりとした。

外から見たら変な光景だったことだろう。夜の建築途中の建物の中に怪しい男が3人。

放火犯と間違えられて警察に通報されてもおかしくないような光景だ。

そういえば、道路を挟んで向かいが某銀行の女子寮だとわかったとき、

3人ともに心がざわざわした。

親父はよく「おい、女子寮を見に行こうか」と言って僕たちを誘った。

もちろん建築がどれだけ進んでいるかを見に行くという意味なのだが、
あながちそれも嘘ではないな、と思った。

親父はエロ本とかを隠し持っているのを知っていたからだ。

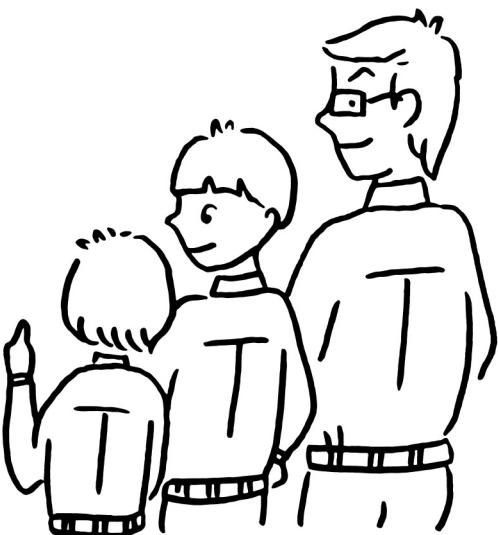
いつものように、内装の出来ていない2階に上がり、

なんとなく道路の向こう側を見ていたら、

灯りの付いた窓から女性の影が見えた。

3人が「おっ」という感じで目をやると、こちらの視線に気付いたのか、
すごい勢いでカーテンを閉められた。ピシャッ。

あ～あ、出歯亀一家に思われたな、と思ってちょっと憂鬱になった。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。



イラスト：W.Valy